

Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／古石真由弥

学校法人
就実学園(就実大学)
理事長

千葉喬三



2014年、経営学部新設。 ものづくりの盛んな地域だからこそ 育てたい経営のプロフェッショナル

就

実学園は2014年に創立110周年を迎えます。歴史ある教育機関ですが、昔のままでは通用するとは考えていません。定速走行ではなく、常に先のことを考えた加速走行をしなければ、時代から取り残されてしまいます。資源に乏しい日本にある数少ない資源が「脳」であり、それを鍛えるのが教育です。教育の質を高めるため、11年に理事長に就任した私がまず始めたのが教員の業績評価でした。結果は研究費の配分や賞与などに反映するため反対もありましたが、これは社会的に果たすべき責務だと考えています。今では県下の高校の先生方に「評価に耐えた優秀な教員がそろっているため安心して生徒を送りだしてください」

と申し上げられるまでになりました。

授業についても見直しています。先人が築いた知識体系の修得が高校までの教育の基本だとすれば、大学での教育は、自分で問題を見つけ、考える力を身につけること。そのために重視するのが実習や演習を中心とした対面教育です。黒板に向かい知識を伝えるのではなく、学生に顔を見せ対話する教育です。そうした授業を行うためにも教員には授業力の研鑽が求められます。

14年度には経営学部を新設します。経営を標榜する学部が少ない中、四国地域で経営学部を新設する理由は何か。日本は物を作り売ることで成り立った技術立国ですが、近年は近隣国に後れを取っています。いい製品を作り

さえすれば売れるという一方通行の意識が強く、相手国の事情やユーザーの要望の変化に対応できなかったことが理由のひとつでしょう。大手メーカーや商社はそこに気づきユーザーの声をフィードバックするようになりました。中小企業にもそれはできるはず。岡山は、東大阪市や東京の大田区と並ぶ高い技術をもった中小メーカーの集積地。世界に冠たる工業県です。「経営」ができる人材さえ育てば、大手企業や商社を通さずとも世界中どこでもダイレクトに製品を売りだすことが可能です。ここ岡山が見本となり、全国に影響を与えたいと考えています。

育てたいのは、従来の枠に縛られない、多様で可能性を秘めた人材です。やもすれば大人は、自分勝手にルールを敷き、子どもたちを安易に、あるいは無理やり乗せようとします。それによって可能性の芽を摘んでは大変な損失です。ルールという「線」ではなく、「面」を示さないといけません。そのためには、少しでも高いところに引き上げ、視野を広げること。それが教育者の仕事です。そうやって見えてきた面にどんな線を引くかは本人次第。どんな線であっても、自分の意志で引いたからには責任をもつはず。

【理事長プロフィール】ちば・きょうぞう●1939年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士課程単位修得退学。高知大学農学部助手、岡山大学農学部助教授、同農学部長、同理事・副学長、同学長を経て、2011年6月より現職。

【大学プロフィール】1904年開校の私立岡山実科女学校を起源として1979年に就実女子大学開学。2003年就実大学に校名変更。人文科学部(表現文化学科、実践英語学科、総合歴史学科)、教育学部(初等教育学科、教育心理学科)、薬学部(薬学科)。2014年に経営学部(経営学科)を新設予定(設置認可申請中)。